忘れ物

篠朝樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れ物

【Ｎコード】
Ｎ９９０５Ｉ

【作者名】
篠朝樹

【あらすじ】
渡久地と付き合ってる感じの出口。

雨の日というのは誰しも好んでは出かけたがらないものだろう。
出口だってもちろん例外ではない。

朝からしとしとと間断なく降り続く雨に、今日は一日部屋の中で過ごそうと決め、適当な雑誌と、先ほど入れたばかりのコーヒーを手に、ソファにどさりと腰を下ろした。

どれ程の時間が経ったのか、掛け時計の秒針の音ばかりがやけに耳に付くようになる。集中が切れた証拠だ。
コーヒーでも入れ直して、気分転換を図って…、それから簡単なパスタでも作って昼飯にしよう。
頭の中で計画を立てていると、携帯の着信音が鳴った。

特に相手を確認することなく電話に出ると、
「雨、降ってんだけど」
何の前置きもなくいきなり声が飛び出してきた。
「…今どこ」
出口も慣れたもので、いちいち会話の方法に文句を付けることはしない。意図を読み取り、最小限の言葉でなるべくスムーズに事が運ぶ様に心掛ける。
「駅」
と単語が返ってきて、
「改札出た所で待ってろ」
通話を終了した。

玄関にあった傘を二本持ち、ドアを閉めた。マンションのエントランスを出たところで自分用の傘をさし、はた、と気付く。

もう一本の傘、…これは…。
暫く迷ったが、多少のいたずら心もあり、そのまま持って行く事にした。

駅に着くと、屋根のあるぎりぎりの所で渡久地はタバコを吸っていた。
出口はその前に立つと、
「ほら」
と傘を差し出した。
渡久地はそれをちらりと見遣り、
「女が忘れていったのか」
「…わかるか？」
当たり前だろう、とくすくす笑う。

落ち着いたベージュの地に、薄い茶と水色の大きな水玉模様、細い柄。どう見ても女物だった。
そんな傘を差し出されて、渡久地がどういう反応を見せるのか、出口は多分に興味があった。こんなものさせるか、と怒るか、はたまた何の感慨も見せず、何食わぬ顔で受け取るのか。

すると渡久地は差し出されたその傘を出口の手から奪って、
（やっぱり、動じないよなあ）
と出口が思った直後、それをぼすっと、駅のゴミ箱に突っ込んだ。
あれ、じゃなくて怒ったのか？、と思い直したが、渡久地はいやに楽しそうな顔で出口に言った。
「傘は、一つで充分だろう」
出口の腕に手を絡ませ、雨の中へ踏み出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9905i/

忘れ物

2011年10月6日07時01分発行